新渡戸稲造のキリスト教人格論とその実践

—21 世紀日本の教育への指針—

湊　晶子

序

明治政府が近代国家と社会を建設するために、教育の果たす役割を早くから認識し、全国民に普通教育制度を普及すべく努力したことは日本の教育史上特筆すべきことである。しかし今日のようにすべての人への義務教育制度ではなく、1874(明治 7)年に提出された官公、私立の統計によると、当時設立された 32 の中学で男子生徒 3, 125 人に対して女子生徒は 28 人という状況であった。

しかし明治 9 年には女子生徒の数が飛躍的に伸び 1, 112 名に、同 12 年には実に 2, 747 名に増加したのである。これは明治初年に来日した宣教師たちにより、キリスト教人格論にもとづいた教育が、私立学校を中心に推進されたことによる。特に女性の人格の確認という近代精神に基づき、長い間男性の隷属下に置かれがちであった女性に新たな息吹をあたえた。またキリスト教人格論は、国家主義的、唯物主義的・破壊的思想の下にあった男子青年たちへも大きな影響を与えた。

近代日本形成期に日本の近代化に影響を与えた人物は数多く取り扱われているが、戦争と紛争の続く現代世界に、また心の教育が求められる現代日本に、いま最も求められる人物は新渡戸稲造の様な人物であると思う。新渡戸稲造についての研究は多方面からなされているが、「新渡戸のキリスト教に立脚した

人格論とその実践」についてまとめたものは少ない。明治・大正・昭和への影響を分析しつつ、21世紀の指針としたい。

Ⅰ　新渡戸稲造のキリスト教人格論

1.　教育者新渡戸稲造の生涯とキリスト教との接点

稲造は1862(文久2)年、日本がいまだ西洋と普通の関係がなかった頃、盛岡南部藩士の家に生まれた。即ち日本の代表的階級である侍の家で、漢書、仏教、中国思想、日本文化など伝統的教育を受けた。幼少で父と死別、1871年、9歳で叔父太田時敏の養子となり上京、東京英語学校で西洋文化に初めて接した。その後1877年札幌農学校の二期生として入学、内村鑑三、宮部金吾らとともに洗礼を受けキリスト者となった。これは日本にプロテスタントが紹介された1859年からわずか18年後であったことに注目したい。

卒業後、今日の東京大学に学ぶが、「太平洋の橋」すなわち、西洋と東洋の橋となるべく、1884年東京大学を中退して、ジョンズ・ホプキンス大学に留学、1886年にはボルティモア友会員に認められ、クエーカー教徒としてフィラデルフィア友会にも知られるようになった。

1891年には、クエーカー教徒でありフィラデルフィアの名門エルキントン家のメリー・パターソン(後の萬里子夫人)と結婚した。教養高い女子教育者、平和主義者メリーとの結婚は、近代日本形成期における新渡戸の女子教育への献身的な働きに大きな影響を与えた。

結婚1ヶ月後には二人で帰国、稲造は母校・札幌農学校の教授となった。長男・遠益(トーマス)を生後数日で亡くし、失意の中で、メリーの実家から送られてきた資金で未就学児童のための遠友夜学校を設立、自ら無給で校長を務めた。稲造亡き後、メリーが二代目校長を務めたことを知る人は少ない。

稲造は激務のため体調を崩し、アメリカで静養中の1900年、『武士道」を英文で出版、帰国後は京都帝国大学教授を兼ねて台湾総督府に勤務、1906年第一高等学校校長、1908年、『実業の日本』編集顧問、1913年東京帝国大学教授に就任した。

これらの幅広い人生経験を経て、1918年56歳で東京女子大学の初代学長に就任し、女子人格教育の推進のために心を尽くした。1920年国際連盟成立とともに事務局次長に就任し、思想、文化、価値観の異なるあらゆる場面において対話の道をつくり、軍部の台頭で急速に軍国主義化し、平和主義からも民主主義からも離れて行った日本のために尽力した。日本からも、アメリカからも孤立して行く中で、1933年カナダのバンフで開催された太平洋会議に日本代表委員として出席した後、ビクトリアで72年の生涯を閉じた。1877年の受洗から実に56年の長きに亘りキリスト者として人格教育に当たった。

2.　新渡戸稲造の「人格」とキリスト教

新渡戸は、人格をPersonalityと表現した。『西洋の事情と思想』の中で「人格の意義」について次の様に述べている。「西洋人は、パーソナリティを重んずる。パーソン即ち人格である。日本では人格といふ言葉は極めて新しい。私等が書生の時分には、人格といふ言葉はなかつた。パーソンといふ字はたゞ『人』と訳してゐた。しかし仔細に調べると、メンといふ意味とは違って『人たる』といふ字である。格といつても資格といふやうな意味は毛頭持たない。人工的な、或は社会が拵へ上げる資格などとは、まつたく違ふ意味である。孟子が度々いつた『人は人たり我は我たり』の意味を持つその人格である。ところが日本では、この人格といふ意味がよくわからない。私の知つてゐる人で、新しい頭を持つた学士が、田舎へ引込んで村の改良を企らうとした。然るに、その周囲の人々は、『お前さんも大学を出て学士になつたのだから、東京でお役人にでもなつたらどうだ。そして十分に人格をつけて来い。』といふ、笑話にもならない実話がある。恐らくその人が役人にでもなつたら、それこそその人は持前の人格を落とすことになるであらう。さういふ例を見ても、人格といふ言葉は、言葉それ自体すら十分わかつてゐないのである」[1]。

新渡戸が『西洋の事情と思想』の中で取り上げたパーソンは、当時一般に理解されていた「個の概念の始まりを近代に置く見解」ではなく、「西暦紀元の

[1]　新渡戸稲造『西洋の事情と思想』(実業之日本社、1934年)、『新渡戸稲造全集』第6巻(教文館、1969年)収録563頁

初めから6世紀ぐらいまでの神学的見解」に置くものであった。それはキリスト教的人格論であり、聖書の時代から325年のニカヤ公会議、381年のコンスタンチノポリス公会議、451年のカルケドン会議を経て形成された三位一体論に根拠を置く人格論であった。即ち人格は三位一体の神との関係性の中に形成されるという視点である[2]。さらなる歴史的分析については、坂口ふみの『「個」の誕生』を参照されたい[3]。

人格という言葉は英語ではperson、ドイツ語ではPersonで、ラテン語のpersonaに由来する。キリスト教文化の中に歴史を刻んで来た西洋においては、スリー・パーソンス・イン・ワン、父なる神、子なるキリスト、聖霊とそれぞれ三つのpersonaを持つという概念が歴史の中に地下水の様に流れている。新渡戸は、「とにかく西洋では、宗教の関係上、パーソンということを頻りに説いたものであるから、一般人にもその意味がぼんやりとわかっていた。(中略)詰り、東洋と西洋の考え方の違ひは、パーソンというものに根柢して、そこから起る差が非常に多いのである。パーソンというものを深く認めればこそ、他人の権利も認めるのである」[4]と述べ「人たる」ことを重んじ、「人格」と「キリスト教」の接点を提示した。

新渡戸稲造のキリスト者としての信仰に関する論争はあるが、その内容についてここで論議することは避けたい。角谷晋次(盛岡大学文学部教授、宗教主任)による「新渡戸稲造のキリスト教信仰」[5]、佐藤全弘「新渡戸稲造の信仰」『新渡戸稲造研究』[6]、宮本信之助「若き新渡戸稲造の信仰」『新渡戸稲造研究』[7]を参照されたい。

2　湊晶子「新渡戸稲造における私と公と公共」『公共哲学16 宗教から考える公共性』稲垣久和、金泰昌編(東京大学出版会、2006年)184～186頁

3　坂口ふみ『「個」の誕生―キリスト教教理をつくった人々』(岩波書店、1996年)

4　新渡戸稲造　前掲書564～565頁

5　角谷晋次「新渡戸稲造のキリスト教信仰」『新渡戸研究』第2号(新渡戸稲造会、1993年)91～121頁

6　佐藤全弘「新渡戸博士は真のクリスチャンか」『新渡戸稲造―生涯と思想―』(キリスト教図書出版社、1984年)475～481頁

7　宮本信之助「若き新渡戸稲造の信仰」『新渡戸稲造研究』(春秋社、1969年)5～33頁

新渡戸は「パーソン・人たる・人格」についての総論を「神学論争」の中から引き出すのではなく、創造主との直線的な愛に満ちた関係の中に人格形成の源泉を見出そうとしたのである。彼は随所で垂直的ヴァーティカルな関係の必要性を説いた。人間は単に横の関係ホリゾンタルだけで生きるものではなく、縦の関係においても生きなければならないことを指摘した。「人間は大きな心で人と和して行かねばならない。絶対を楯に取り、理屈を一理も曲げずに、他人をことごとく小人視して、我独り澄めりという心がけでは、世の中は少しもよくならない。どれほど高い理想を抱こうとも、実行に当たっては譲れるだけ譲り、折れるだけ折れて行くのが大切である」「人はどこか動かすべからざる所、譲れぬところ、断乎犯すべからざる信念がなければならない。人を相手とせず、天を相手とする覚悟をもたなければならない。博士はこれを縦の関係Vertical Relationと呼んだ」[8]。この縦の関係を結びえた人が他者との関係からでなく、自己を確立し、ぶれないで自己の方針を決め、己が革新に生きることができるというのである。ここにキリスト者としての新渡戸の強さと慰めを見るのである。

筆者は、新渡戸のキリスト教に立脚した人格形成について、次の様に要約したい。「人はどこか動じないところ、譲れぬという断固とした信念がなければならない。人格神との縦関係から生ずる対話性の中に人格は形成される」と。先に『西洋の事情と思想』の「人格の意義」の中で新渡戸が、「西洋人は、パーソナリティを重んずる。パーソン即ち人格である。日本では人格といふ言葉は極めて新しい。私等が書生の時分には、人格といふ言葉はなかった。パーソンといふ字はたゞ『人』と訳してゐた」点について指摘したが、今に至っても日本において「人格」の意味が曖昧である。

3.　クエーカーキリスト者新渡戸の人格論の原点

明治以降急速に創立されたキリスト教主義教育機関の建学の精神には、ほとんどの学校で「人格教育」を掲げる。教育基本法にも「人格」が語られる。一

8　佐藤全弘、前掲書、259頁

般にどの様に理解されているか。今こそ新渡戸の人格論を再検証する時ではなかろうか。

人格を形成することこそ、人格教育と教養教育の第一の目的であることを早くから新渡戸は指摘した。1933年刊の『内観外望』に収録された「大学教育の使命」と「大学教育と職業問題」によくまとまった論述があるが、人格教育に関してはこれよりさらに早い次点(1907年)に出版された『随想録』の中で、「教育の目的」と題して取り扱っている。

『内観外望』の「大学教育の使命」の項において教育の第一目的を「人の心をリベライズ（自由）し、エマンシペイト（解放）すること」[9]と定義した。また、大学の存在理由について、「自分より偉い人格グレート・パーソナリティに接するといふことである」[10]と述べた。

すでに新渡戸は当時の日本の教育について、1906年に「我が教育の欠陥」と題して「今日の教育たるや、吾人をして器械たらしめ、吾人よりして厳正なる品性、正義を愛するの念を奪いぬ」[11]と主張し、あくまでも教育の目的を人格形成に置いた。

1904年2月の「性と行[人格形成か行為業績か]」において、「人の行為は主として其品性を表彰するものなるが故に之を尊しとす。善人の戯は愚人のいと賢き業よりも予を教ふること多し。“to be”と云ふは、“to do”と云ふよりも遥かに重んずべきものぞ。汝、善なるべし、しからば汝の為すところ皆善なるべし」[12]と述べ、人間はただ一人、神と相対して立ち、その神により慰められ、強くされ、魂の平安を得て存在することが出来ると考えた。

新渡戸にとって、「宗教とは神の力が人の心に働きて、其の人に特有の働きをなさしむるものである」。「宗教とは人が神の力を受けて、之れを消化し己

[9] 新渡戸稲造「大学教育の使命」『内観外望』(実業之日本社、1933年)、『新渡戸稲造全集』第6巻407～409頁
[10] 新渡戸稲造「大学教育と職業教育」前掲書439頁
[11] 新渡戸稲造「我が教育の欠陥」『随想録』(丁未出版社、1907年)、『新渡戸稲造全集』第5巻(教文館、1970年)115頁
[12] 新渡戸稲造「性と行[人格形成か行為業績か]」前掲書22～23頁

の性質に同化して、己のものとして、之を他に顕はすことを言うのである」[13]と説明され、内村鑑三の様な厳しい人格神との神学的対話よりも、神の力が人の心に温かく働いて人を生かす力としてとらえられていた。これは新渡戸のクエーカー教徒としての信仰の故であろう。

松川成夫は「新渡戸の教育の根底にある宗教的信仰」に於いて、クエーカー信仰者としての新渡戸の信仰について次の様に説明した。「クエーカーでは信仰は神の霊的交通であることを重んじる。(中略)クエーカー信仰は一面では神秘的、多面では実践的であった。神秘的方面はこれを口にせず、実践的方面は行いをもって活発に現すものとした。新渡戸稲造の宗教も神秘的実行主義であって、信仰の教義内容については多くを語らず、其の実を実際生活に結ばせるという性質のものであった」[14]と。新渡戸にとって「宗教とは何ぞや」で指摘した如く、我一人では、弱き悲しき存在であるが、ただ一人神と相対して立ち、その神により慰められ、強くされることによって、魂の平安を得て立たせるものである。新渡戸は「悲しみの人」であったからこそ、激動の世にあって「寛容の人」であり得た。新渡戸は、『人生雑感』の中の『悲哀の使命』において「基督は聖書に悲しみの人と誌され、ゲーテは基督教を悲哀の宗教と称した事を観ても、如何に基督教が悲哀に重きを置き、且つ悲哀の観念に打たれて心細く思ふ人、淋しく感ずる人、即ち悲哀の人々に偉大な慰藉を与へるかが解る」[15]と記している。新渡戸自身一高の校長時代に、矢内原忠雄に「新渡戸先生の宗教と内村先生の宗教とは何か違ひがありますか」と聞かれたことがあるが、「僕のは正門でない。横の門から入ったんだ。して、横の門といふのは悲しみという事である」[16]と答えたそうである。後に矢内原忠雄は、「新渡戸先生の宗教」の中で正門とは贖罪の信仰のことで、これは内村先生の信仰の中心であり、新

[13] 新渡戸稲造「宗教とは何ぞや」『人生雑感』(警醒社書店、1915年)、『新渡戸稲造全集』第10巻(教文館、1969年)19頁
[14] 松川成夫「新渡戸稲造の教育思想」『東京女子大学比較文化研究所紀要』第52巻(東京女子大学比較文化研究所、1991年)62頁
[15] 新渡戸稲造「悲哀の使命」『人生雑感』58頁
[16] 矢内原忠雄「新渡戸先生の宗教」『矢内原忠雄全集』第24巻(岩波書店、1965年)

渡戸先生の信仰の中心は贖罪よりも、悲しみにあったのではないかと述べている。

クエーカーでは聖礼典を行わないし、神への礼拝は霊的交渉の中にこそあり、他のなにものにもないと考えるので洗礼も聖餐も認めていない。この点の解釈で神学論争をもち込むことはしない。むしろ自然の内に、自然を通して神的霊感に触れようとする汎神論的意識構造の強い日本人の思想に、新渡戸が「人格的な神との交わりの中に人格形成が可能である」ことを明確に示した点を評価すべきである。この点に関しては、石原謙「人格的宗教と汎神論」[17]を参照されたい。クエーカーの教義の出発点は「内なる光」にある。具体的には「すべての人を照らすまことの光があって、世に来た」(ヨハネによる福音書1章9節)に言われる光である。我々一人ひとりの内における、人間ではない一つの神格の内在を信ずるのである。新渡戸において人格形成の最も大切なVertical Relationの形成の光である。

武田清子は「人間以外のもの(神)との交わりとしての瞑想meditationを持つ者こそ、大いなる確信convictionをあたえられるのであり、vertical relationを持つ人間は固有の香りを持つと言い、人には強要しないが、新渡戸自身は信仰を基礎とした人格主義の立場をとるものである」[18]と新渡戸をキリスト者として、人格論者として明確に位置づけている。

Ⅱ　人格教育者として教育現場における実践

1.　遠友夜学校初代校長として

新渡戸稲造が札幌の不幸な貧しい人々のために学校を設けたいと考えたのは、1882(明治15)年のころ、母校札幌農学校予科で教鞭をとっておられた頃からであった。アメリカに留学中、その思いはますます強くなり、1885(明治18)年11月13日付で親友宮部金吾に次の様な書簡を送っておられる。「二、三年前、僕

[17] 石原謙「人格的宗教と汎神論」『石原謙著作集』第11巻(岩波書店、1979年)550～557頁

[18] 武田清子『土着と背教』(新教出版社、1967年)132頁

が未だ札幌で教えて居った時、僕は公衆のために学校を設立する必要を強く考えさせられた。僕の札幌学校の理想は、三種の生徒を収容するにある。其の第一は、老人或いは成人の為にして、講義は邦語で歴史、経済学、農学及び自然科学を教えること。第二は、青年にして専門学校又は大学を希望するも、官公立の予備校に入学することの出来ない人々のために、又第三には、貧しい人々の子供等に夜学校を建て、初等教育を授け、出来れば英語を少しく、又測量其の他の初歩をも加えたい。此等の部門に女学校を併備し、女子に刺繍(ししゅう)、裁縫、編物を教え、邦語の外に英語をも教える様にしたい。斯かる企図は、神の栄光を崇める道になろうと思う。片時も札幌に於ける此の教育上の理想が脳中より離れない」[19]。

この中の第二の念願は、1891(明治24)年、新渡戸がメリー夫人と結婚して帰国札幌農学校教授となられて間もなく、札幌農学校に進学できる様に私立中学校を建設し、校長に懇望されて北鳴学校をスタートさせることにより達せられた。ちなみに当時の北海道の就学率は低く平均で56パーセント、女子はわずか34パーセントであった。

1892(明治25)年夫妻に待望の長男・遠益(トーマス)が生まれたが、数日後亡くなる。ご夫妻が打ちのめされていた時にメリーのところに実家から千ドル送られて来た。若い時から社会事業と女子教育に生涯をささげてきたメリーは、夫稲造に相談、家が貧しいために小学校にいけない子供や、これまで行けなかった子供たちのための夜学校を設立する基金にそれを充当した。さっそく南四条東四丁目の敷地五百坪と古い二階建ての一軒家を買い取り、遠友夜学校(遠くから友来る)を開校した。稲造が初代校長となり、稲造亡き後はメリーが二代目の校長を務めた。

この遠友夜学校の中に夫妻の教育理念が凝縮されていると思う。次の様に稲造は述べている。「国も名も言葉も分からぬ人、どこの人とも言われぬ人がやって来て会って話してみると何となく分かる。このような人は名を知らず、国

[19] 高倉新一郎「札幌遠友夜学校」『思い出の遠友夜学校』(北海道新聞社、1995年)12～13頁

を知らずとも、心と心が合えば友達である。友達とは名を知るが条件ではなく、心が合えばいいのである。年齢が違っても、地位が違っても、一人は位の高い役人でも、一人は偉い学者でも、金持ちでも、それはたいしたことではない。金持ちだと威張らぬ、学者だとて役人だとて下を見下げぬ、こういう人と会うと嬉しい。これこそ人間の楽しみである。勉強したくても機会に恵まれない人たちが志を同じくして学校に集まり、自発的に勉強するのは本当に楽しいことである」[20]と。遠友夜学校の教育に当たったのは札幌農学校の教師と学生たちで無給で兼務した。遠友夜学校は、まさに新渡戸夫妻のキリスト教人格教育を具現化したものと言えよう。

2. 第一高等学校校長として

新渡戸が京都帝国大学法学科大学教授を辞して第一高等学校の校長に就任した1906(明治39)年は、日露戦争後の動揺期で唯物的・破壊的思想の影響のもとにあった青年たちが増加していった時期でもあった。また国家主義的風潮のもとで、男子の教育では「身を立て名をあげる」立身出世主義が、女子の教育では「良妻賢母」主義が奨励されていた時代であった。校長就任の年に執筆した「我が教育の欠陥」[21]には、明治の新教育制度は成功をもたらした反面、人間を器械にし、厳正な品性や正義を愛する心を奪ったことが指摘されている。

藤永保は「新渡戸稲造における人格形成」の論文において、一高時代の新渡戸の人格教育を次の様に評価した。「新渡戸の人格主義は、生徒たちに多大の影響を及ぼした。新渡戸が就任するに及んで、一高弁論部の主題は、『to do より to be』に移ったと伝えられている。感受性に富む青年期にあたって、内面的世界の重視を説くことは、最も適切な方策であったかもしれない。しかし、一高の歴史がもっていた業績主義の伝統や当時の時代思潮をかえりみるとき、

[20] 湊晶子『新渡戸稲造と妻メリー—教育者・平和主義者として』(キリスト新聞社、2004年)23〜24頁

[21] 新渡戸稲造「我が教育の欠陥」『随想録』前掲書114〜117頁

これは、今日想像するほど容易なことではない。新渡戸の人格をまって、人格主義は初めてわが国青年期の風土に定着しえたのであろう」[22]と。

『武士道』出版6年後に校長に就任した新渡戸は、武士道を理想的なものとして鼓吹するのではなく、むしろ日本人の欠陥とも思われる人格(Personality)、教養(Culture)、社交性(Sociality)の新風を持ち込んだ。それまでの一高の剛健主義、籠城主義、国家主義の校風をいかに摩擦なく新しい方向に導くべきかが大きな課題であった。

新渡戸校長は新しい指導原理としてソシアリティ(社交性、社会性)を一高に導入したのである。当時、知育・徳育・体育の三育をもって理想としていた教育に不満を感じていた新渡戸は、体・知・徳の三育に相当するVitality、Mentality、Moralityに加えて、Socialityを加えた。一高生にとって、ソシアリティは、一高が確立した伝統的精神である籠城主義と相対立する概念であったため、運動部を中心とする保守派から強い反発を受けることになった。

校長就任後、年月の経過とともに、校長を崇拝する生徒と、校長に反感の念をいだく生徒の数が増し、ついに「新渡戸校長弾劾事件」が起こった。校長弾劾の火蓋を切ったのは、1909年3月1日の夜、第19回記念祭の全寮茶話会の席上であった。一高時代に水泳部員として活躍し、1908年に一高独法科を卒業し、後年東大法学部教授となった末弘厳太郎が鋭い舌鋒で、当時学内で起きていた二、三の出来事に関連して、新渡戸を無責任な八方美人と決めつけ攻撃した。この末弘演説に対して、前田多門(1905年一高独法科卒、後年文部大臣)が熱弁をふるって全面的に反論し、校長への信頼と崇拝を明言した。この前田演説は聴く者に感銘を与え、事態は沈静化に向かうかに見えたが、柔道部員の石本恵吉が末弘に同調し、校長不信任演説を行い、校長攻撃が再燃しかけた。

この場を共にした馬場宏明は、『大志の系譜—一高と札幌農学校—』の中で、この場に及んで新渡戸校長が登壇し、一時間余に亘って釈明演説された時のことを次の様に記している。「校長はまず例のように卓上に時計を置き、教授服の袖をユラリと払い、おもむろに語り始めた。その様子はいつもと変わらない。

[22] 藤永保「新渡戸稲造における人格形成」『新渡戸稲造研究』(春秋社、1969年)83頁

校長は、末弘・石本の両君が直言してはばからないのは立派であると賞めた。ついで校長としての覚悟をじゅんじゅんと説き示した。最後に、そのころ有名だった本の中の主人公であるトム・ブラウンの話を引用し、一千の生徒が学校を出て二十年、三十年たったのち、一人でもトム・ブラウンのように昔のことを思い起こし、あのとき校長はそう言った、このときはこう言ったと思い出してくれる人があったら、それが自分の最大の満足であり希望であると述べて、校長は降壇した。新渡戸校長の演説は、生徒を深く感動、感激させた。満場寂として声なく、啜り泣きが聞こえる。校長を嫌っていた石本のような生徒も、今や校長に対して心からの賛仰を禁じ得ない心境となった。雨降って地固まるように、全一高生が新渡戸校長に信服していった。新風は、はじめて、向陵(向ヶ岡)の地に溶け込んだのである。校長就任後、二年半がたっていた」[23]と。

幅広い寛容な精神を持ちつつも、真理を曲げない強い信念を持った人格者の姿を新渡戸校長の中に見る思いである。先にも論じた如く新渡戸は人生の縦の関係と横の関係を説いた。新渡戸のいわゆる縦の関係もしくは垂直的関係というのは、個人の魂と神との交わり、即ち宗教生活であり、横の関係もしくは水平的関係とは個人と個人との交わり、即ち社会的関係を指すものである。世の中には人に譲ってもよいことがたくさんある。広い心で譲れるだけ譲るのが社会生活に平和をもたらす。しかし、どうしても譲れないという点もある。自分が正しいと信ずることを率直に述べれば、世間の誤解や非難を受けよう。それを一々気にする必要はない—神が理解し守ってくださるから。これが新渡戸の人生観の根本であった。

新渡戸は1913年4月、6年半在任した一高校長を辞し、東京帝大法科大学教授となった。この時は生徒たちが新渡戸校長の復職運動を開始するまでに信頼を得ていた。5月1日の夜、全寮晩餐会が開かれた最後の演説で「日本人に最も欠けて居るのはPersonality（人格)の観念ではなかろうか。Personalityのない処にResponsibility(責任)は生じない」[24]と述べた。感銘を受けた、数百

[23] 馬場宏明「大志の系譜——一高と札幌農学校—」(北泉社、1998年)314～315頁
[24] 矢内原忠雄「一高校長を辞められた時(昭和11年2月20日記)」『新渡戸稲造全集』別巻(教文館、1987年)280頁

名の一高生が小日向台の私邸まで送り、「新渡戸校長惜別歌」を合唱し、花籠を贈呈した。一高生のために尽くした新渡戸夫人にも感謝が献げられた。

新渡戸の生涯の親友であった宮部金吾は、『新渡戸稲造先生追憶録』の中で「一高校長時代は、新渡戸君の一生にとって最も記憶すべき時代の一つであったと思うのであります。博士はこの時に単に一高一千の学生の指導者となられたのみならず、日本全国の青年の思想的中心となられたのであります」と述べた。新渡戸のこのような人格教育は、男子学生ばかりでなく、時代を生きた女性たちにも実に大きい影響を与えた。

3. 東京女子大学初代学長として

日本が西欧に門戸を開いた時は、西欧ではすでにルネッサンスを経て宗教改革によりプロテスタント諸派がそれぞれの歩みを始めて久しかったし、イギリス革命、アメリカ独立革命、フランス革命を経て自由と平等が勝ち取られて一世紀以上も経っていた。アメリカでは1648年ブレントにより女性参政権が初めて要求されてから300年余を経ており、イギリスではウルストンクラーフトにより女性の権利擁護が、フランスではコンドルセにより女性参政権が要求されてから200年を経ていたのである。明治政府は近代国家機構や資本主義体制などの多くの改革を急速に行ったが、「家制度」だけは存続させた。このため「女性の人格」とか個人としての存在は、「家」の中に埋没されてしまったところに日本の問題点があると思う。

戦後旧民法は廃止されたとは言え家意識は日本社会に今も根強く残されている。結婚するのはお互いの家(父母)を離れて新しく戸籍を“つくる”のであって、“籍を入れる”のではない。適切な英語の表現が見つからないのは何を意味するのか。「女性・女」は“woman”、「男性・男」は“man”、「妻」は“wife”、「夫」は“husband”、「淑女」は“lady”、「紳士」は“gentleman”、の様にそれぞれ対になる日本語、英語が見つかるのに、「婦人」に対する英語は見つからない。「婦人」に対になる言葉は「殿方」だろうか？婦人会とはよく用いられるが、殿方会とは言わない。

聖書では「ギュネ」という言葉が用いられているが、「ギュネ」が日本語訳では「女、妻、婦人」と三通りに訳されている。例えば、コリント人への手紙

第一14章34節新改訳は「教会では妻たちは黙っていなさい」、新共同訳は「婦人たちは、教会では黙っていなさい」に、マルコの福音書14章8節新改訳は「この女は、自分にできることをしたのです」、新共同訳は「この人はできるかぎりのことをしたのです」と訳している(アンダーライン筆者)。

日本語には、なぜ英語にならない婦人という言葉があるのか心に留めるべきである。「女」篇に「箒」(ほうき)を組み合わせると婦人の「婦」となる。筆者が1989年から1990年までハーバード大学神学部より客員研究員の招聘を受け、渡米した折、「日米女性論の比較」と題して講義を依頼された。当時アメリカでは、女性解放論が、日本では自立論が主流であった。日本語の自立を英語に訳そうとして適切な英語がないことに気づいた。Independent、Self-esteem、Identityどれも適切ではないのである。日本の“イエ”社会、日本的意識構造の中で、どのようにして「個」を確立し、自己確立すべきかを問うた講演であった。この講演では、“Women's Jiritsu”、“The concept of ie (family)”ということばを用いて論じた。この講演は“Women's Jiritsu and Christian Feminism in Japan”と題して*The Japan Christian Review*[25]に掲載された。

明治以来の日本的事情の中で、岸田俊子、福田英子らは女流民権運動家として活躍したし、森有礼、福沢諭吉、津田真道らは男女同権論や女性の地位向上について進歩的な意見を『明六雑志』などに掲載した。

しかし、新渡戸が求めた女性論は、政治的権利の主張というよりは、根本的に神の前に男性も女性も同等の「人格」として創造され、存在“to be”しているとするキリスト教に立脚した人間観であり、自立論であったことに注目したい。新渡戸はこの人格論を一人でも多くの人に普及させることを願って、『実業之日本』のような大衆誌や『婦人画報』、『婦人世界』、『修養』、『世渡りの道』、『一人の女』、『婦人に勧めて』などに記事を書いた。

『婦人に勧めて』の中で、「西洋の家庭は比較的夫婦相互の人格が認められて居ると思ひます。『人格論』と言ふ、書を読みますと、西洋で人格の認められたのは基督以来のことで、これが哲学的に説明されたのはカント以後である

[25] Akiko MINATO, “Women's Jiritsu and Christian Feminism in Japan,” *The Japan Christian Review*, vol.59, 1993, pp.7-17.

とありました。基督以来と言えば、約二千年、哲学的に説明されたカントからでも百年であります。(中略)然るに日本では、女だからと言ふ言葉の中に既に女を一段低く見た意味を含め、更に何(なあ)に女房なんかと言う言葉に於て、殆ど其の人格を没却して居ります。(中略)単に家庭ばかりではありません。日本では人の人格を認めることに就いて、非常に欠けているところがあると思ひます」[26]と。

さらに女性の教育について、「中には医科を志す人もありませうし、哲学を専攻する人もありませうから、社会は一般に此健気な婦人の志を枉げない様其道を拓いてやらねばなりますまい。(中略)其父兄も其娘に保険料でもかける様な考へで、進んで高等教育を授けて貰い度い。結婚の衣裳に大金を投ずるだけが親としての責任ではなく、衣裳以上の頭を持参させるやうにしたいものであります」[27]と率直に社会に訴えた。

明治時代にプロテスタントの影響のもとで創立されたキリスト教主義学校は約56校、そのうち女子の学校は42校にものぼることからも、女性の人権、人格の確立などが強く求められた事情が理解できる。1897年頃以降になるとこれまでのキリスト教主義女学校の創設に加えて、我国の教育レベルの向上を目指して、私立女子大学の創設に力点が移行されるようになった。1900(明治33)年には津田梅子により女子英学塾(後津田塾大学)が、1901(明治34)年には成瀬仁蔵により日本女子大学校(後日本女子大学)が、1918(大正7)年には新渡戸稲造を初代学長に安井てつを初代学監に迎えて東京女子大学が創設された。新渡戸が東京女子大学の学長に就任したのは、第一高等学校の校長に就任してから12年を経た56歳の時であった。新渡戸の人格論を東京女子大学の女子教育において集大成したといっても過言ではない。

1918年東京女子大学開校式式辞において、「婦人が偉くなると国が衰えるなどというのは意気地のない男の言うことで、男女を織物に譬えれば男子は経糸、女子は緯糸である。経糸が弱くても、緯糸が弱くても織物は完全とは言われま

[26] 新渡戸稲造『婦人に勧めて』(東京社、大正6年)『新渡戸稲造全集』11巻(教文館、1969年)46頁

[27] 前掲書195頁

せぬ」と明言し、日本独特の女子教育と誇ってきた良妻賢母主義をしりぞけた。単に妻業、母業という職業的教育ではなく、生きること、存在すること、“to be”の根本原理を知るための学問をしなければならないと説いた。即ち日本の伝統的価値観の中に、キリスト教に基づいた普遍的価値としての人格を築こうと努力したのである。人間をこえたもの(神)とのVerticalな関係を樹立して、個を確立し、その上で水平的Horizontalな関係を生み出す社会ソシアリティを形成していくことの必要性を女性たちに説いた。

新渡戸は1933年亡くなる数ヶ月前に実業之日本社から『内観外望』を出版したが、その中の「大学の使命」の項で、「心をリベラライズするといふこと、エマンシペートすることが、私は学問の第一の目的だと信ずる」[28]と力強く述べた。東京女子大学のキャンパスにおいて先生は、イエ概念の中から完全に抜け出せなかった女性たちの心をリベラライズ自由にし、解放して下さったのである。日本における真の女子教育者の姿を見る。

新渡戸の女性人格教育者としての理論はジュネーヴから送られた東京女子大学本科第一回卒業生宛の式辞の中に集約されている。「此の学校は御承知の通り我邦に於ける一つの新しい試みであります。従来我邦の教育は兎角形式に流れ易く知識の詰込みに力を注ぎ、人間とし、又一個の女性としての教育を軽んじ個性の発達を重んぜず、婦人を社会而も狭苦しき社会の一小機関と見做す傾向があるのに対して本校に於いては基督教の精神に基いて個性を重んじ世の所謂最小者(いともちいさきもの)をも神の子と見做して知識よりも見識、学問よりも人格を尊び人材よりは人物の養成を主としたのであります」[29]。婦人を一種の器と見做して来た日本社会に、「キリスト教に基づいた人格教育」を定着させた新渡戸の教育理念を、21世紀の日本に伝える責任を私たちは荷っていると思う。

[28] 新渡戸稲造『内観外望』前掲書409頁

[29] 新渡戸稲造「ジュネーヴ湖畔にて」『学友会雑誌』第2号(東京女子大学学友会、1923年3月)

Ⅲ　キリスト教人格論を21世紀に具現化させる責任を

新渡戸が強調する縦関係・垂直的関係「人格Personality」が横関係「水平的・Horizontal」に交わる時、はじめてそこに「公」「公共世界」が広がる。まず「個」が確立されて、はじめて「公・公共」が可能となる。しかし残念ながら「公・公共」の概念は日本にしっかり根づいていないため、新渡戸はその概念をソシアリティSocialityという言葉で表現せざるを得なかった。

日本では近代日本形成期から、「教育の目的」が「大日本帝国国家の目的」と一致統合される方向で進められて来たために、教育の国家からの相対的独自性の主張からも、自由主義的議論からも分離させるものとなった。すなわち、「公」は「国家」であり、「主」であり、「私」は「個人」であり「主」に対して「従」の関係をつくり出したのである。ここにおいて公私は主従関係となり、「滅私奉公」の日本思想の基盤となった。

近年、日本においても、公共哲学共同研究会(公共哲学京都フォーラム)が立ち上げられ、グローバルかつローカルなレベルで、「公」と「私」と「公共」について各方面の論者の意見を統合して、自由闊達な討論がなされる様になった。また日本学術会議においても、「学術の動向」において、公共性について2007年7月8月と2回続けて取り扱ったことも意義深い。藤倉晧一郎は、「私personは独立の個人individualであり、社会的活動を行う人、市民、人民citizen、peopleであり、この市民が二人以上でなにかをすることが公であり、public、republic、commonである。したがって、アメリカ人の多くは政府governmentが公であるとは考えない」[30]と分析した上で日本の公益信託の問題を論じておられる。官による公の占有を破り、私が公を創造するためには、まだ相当の時間を要するとの結論に同感である。

日本は今後グローバルな協調関係の中により深く仲間入りするためには、「公」が「国家」であるという意識に逆もどりしてはならない。筆者は教育基

[30] 藤倉晧一郎「アメリカ法における私と公―公共信託の理論―」『学術の動向』2008年8月号(日本学術会議)25～29頁

本法改正時に、他の心ある教育者数名と共に国会議事堂における記者会見に臨んだ。新渡戸の人格論と公・公共の精神を訴えたかったからである。

私が第二次世界大戦中、国民学校、女学校で受けた「滅私奉公」的お国のために命を捨てる教育に日本を逆戻りさせてはならないのである。昭和に入ってから軍部が急速に力を強め、ファシズムが台頭して来たことは周知のことである。1931(昭和6)年の満州事変後、公(国家)の私への圧迫は強くなり、1932年新渡戸が松山で地元新聞社に語った発言により軍部から圧迫を受ける様になった。「日本を滅ぼすのは共産党ではなく軍閥だ」と発言したからである。1933(昭和8)年ナチスが政権を獲得後ますます軍閥の圧力が大きくなる中、新渡戸は10月15日カナダのバンフで開催された第5回太平洋会議出席後、ヴィクトリアで客死した。

日本がますます軍国主義化していく中、新渡戸の第一高等学校時代の弟子たちが、勇気と信念をもって立ち上がったことは歴史的に意義深い。矢内原忠雄は昭和12年右翼からの圧力のもと、憂国の叫びをもって東京大学経済学部に辞表を提出し、伝道者の道を歩んだ。南原繁は昭和20年3月10日の東京大空襲の後、「洞窟の哲人」を捨て、3月に東大法学部学部長となり、降伏の条件など終戦工作に尽力した。 敗戦の年の12月には東大総長に就任、東大だけでなく、敗戦によって精神的廃墟と化した日本の復興のために勇敢に闘った。

1946年敗戦の翌年には日本国憲法が発布され、つゞいて1947年には教育基本法が制定された。この教育基本法の制定にかかわり、敗戦の日本を復興に導いた人々の中には新渡戸の弟子が多かったことを忘れてはならない。南原繁、日高第四郎、前田多聞、安部能成、河井道らである。

この教育基本法が多くの反対を押し切って2006年(平成18)年に改正されたのである。「われらは、さきに日本国憲法を確認し」と「この理想の現実は、根本において教育の力に待つべきものである」の部分が削除されたのである。日本国憲法の理想の実現と教育基本法との関係を明確化した部分が削除されたのであって、新渡戸稲造の弟子の多くで構成されていた教育刷新委員会メンバーが現存していたら異議申し立てしたに違いない。

新渡戸の「人格・Personality」の概念と「公・公共・Sociality」の正しい概念を21世紀に伝え、国際社会に日本が正しいアイデンティティを獲得するための責任を現代の日本のキリスト者は果たすべきであると思う。

(前東京女子大学学長、東京基督教大学名誉教授)